THE LADIES' JOURNAL OF EDUCATION.

驛遞局認可

明治十九年十月二十五日　定價金四錢

女學雜誌

第四十號

每月三回發行

績文舍

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

目録

●〔女學叢誌〕婦人の教育●〔中外新報〕東髮圖解密畫入外數件●〔學藝一斑〕理學一斑●〔對譯〕英和羅馬字の對譯●〔列女傳〕川元さい女の傳（畫入）●〔雜記〕學校家庭子女輕退、微傷手當法○吉野拾遺名歌の譽●〔新作物語〕巢守妻第九回（畫入）〔春のや主人〕●〔家政要報〕破れ物○勝手向取締心得其他日用品相場●〔御伽草〕女狐不信切（畫入）●〔寄書〕米價の事

◎女學叢誌

婦人の教育（二）

（第三十一號の女學叢誌を參看あるべし）

婦人の教育に就ては種々の議論あることにて歐米にても諸大家殊に教育家の間に於て最も議論あることとなれどもこれを大別すれば（一）婦人は心身ともに男子より弱きがゆゑに餘りに高尚なる學問をなし腦力を使ふときは心氣を損耗ひ身體の上にまでろの影響を及ぼして遂には子孫の發生を害すべく且つ婦人は他に嫁して家内を取締り家庭に於て子女を教育するものたれば到底男子とゝもに世に立て相拮抗はよろしからずといひまたこれに反對するものゝ説は（二）婦人なればとて何條男子と異るところあるべき男子のなし得べきほどのことは婦人もまた爲し得ざるの道理なく殊に歐米にては年々に婦人の人口增殖し男子の數よりも超過るの有樣なれば婦人もまた男子と均しく學問をもなすべく職業をも學び獨り立て世を渡るの覺悟なくんばあらざるなり現に高等の教育を受たる婦人に就き一々その取調べをなせし時は腦力を損耗ふなどのことは信とすべからざるのみならず却て身體を强壯くなしたる結果ありなど甲唱へ乙駁し議論いと盛んなる有樣なり

我邦にありても目下婦人を教育するの目的を定むるには充分の考へを要すべき議題なりと思ふがゆゑに余輩もまた聊か思ふ所を述て世の教育家に質し參らすべし抑々教育とは廣く之をいふ時は如何に生活を爲すべきの途を教ふるものにて世の人々とゝもに可成大なる幸福を得て可成氣樂に暮すべき方法を教ふるに外ならずといへりされば人の家に住み人の膳を喫り人の衣するものを着萬事萬端人の厄介となりて暮すときは何の幸福なることかあるべき我が邦の婦人は即ち斯る有樣なるがゆゑに人間の幸福といふことをば夢にだも知らず氣樂なりといへば則ち氣樂なるがごとくなれども眞の氣樂とはいふべからずして常に男子の奴隷たるを免れずこれ從來の教育が然らしむるところにして眞の教育學の旨に戻りたるが故なり斯くてはたゞに婦人の身の上に幸福なきのみならず男子の爲に

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

もまた幸福渉くして倶に共に樂しき暮をなし遂んと難かるべしされバ今より我が國我が社會の幸福を增さんよハ一家の幸福を計るべし一家の幸福を計らんにハ婦人の敎育を改良し敎育上の制限を解くと必要なりと思ふなり婦人の文章ハ男のごとくあるべからず婦人の物いひ振ハ斯くあるべく婦人の步行樣ハかゝるべし彼の書物ハ婦人の讀むべきものにあらず此の學科ハ婦人の學ぶべきものにあらず是ハ男子の職業よして彼ハ婦人の仕事にあらずなど一々制限を立てその範圍の內に養ひたてんとするハ取も直さず敎育の牢獄に繫ぎたるものにして爭でか一家の幸福を得らるべき況して一國一社會の幸福をや男子が米の飯を食して生活するとなりせば女子たりとてまた米の飯を食せざれバ生活し能はざるとならん米を食せんにハその米を得るの方法なくてハ叶はざるとなるべし米を得るの方法とハ即ち生活をなすの方法にして男子が學者となりて米を得ば女子もまた學者となりてこれを得べく技藝家ともなるべく職人ともなるべし男子の學ぶことにして學バんと欲するところのものをば何事にても女子の學び得られざるとやあるべき男子の食する米と女子の食する米と異りたらんにハいざ知らず男女均しく同一の米を食するからにハこれを得るの方法に於てもまた男女の區別あるべからず獨立して生活し自立して世を渡ると敎へずして男尊女卑の風を破らんとハ釣鉤なくして魚を釣らんとするに異ならずいづれの時か男女同權の域に進むべき自立して生活するの道を得てこそ男尊女卑の風も改まれいまだ立と能はずして高きよ登るものハあらざるなり自立して生活そるの道を求むるとハ男子として男女二人前の生存競爭となさしめず婦人もまた男子と助けて生存の競爭と働き責て婦人自身丈ハ男子の厄介ものとならざらんとと勸むるにありこれ婦人のみの幸福を計るにあらず男女雙方の幸福即ち一家一社會の幸福と增すの道にして敎育の上に於てハ男女の區別あるべからずところ思ふなれ

◎中外新報

○文部大臣の意見　同大臣の嘗て英國に公使となりて在しし時より疾くに我が邦女子敎育の振ざるを歎き給ふよしに聞もし且つ記者ハ同大臣の外國にて或る新聞記者に語らせたりとて倫敦の新聞紙に揭げしと讀みし事もあるほどなれば今の官に移らせたるハ兼ての宿論を實地に行ふべき地を履み給ふものにて大臣の滿足も嘸かしと思ぞれ且つ我が邦に婦女子

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の幸ひにこそと思ひしに果せる哉この頃聞くところに據れば歐米諸國の教育法を標準として大に女子の品位を進むべき見込にて既にその意見書を内閣に提出ありしといふまた一報にはこの意見書と云ふは女子を大學に入學せしむるとに就てなりともいへり孰れにしても大臣の意見にして女子の品位を進むるにありとせば遠からずして女子教育の上に著明なる光輝を見るの期あるべしと思はる

○高等師範學校卒業生　の服務規則は去る十四日文部省令を以て定められたるがその中女子師範學科卒業生の服務年限は卒業證書受得の日より五箇年としその間教職に從事するの義務を有するものとすまた卒業證書受得の日より二箇年間は文部省指定の場所に奉職するの義務を有するものとすとあり

○婦人の入會　米國インデヰヤナポリス高等學校のリリーマーテヰン孃といへるはこのごろ開きたる米國理學奬勵會の會員に選ばれて入會したるよし同地教育雜誌に見ゆ

○婦人の受驗者　東京府廳に於て去る九月廿八日より今月十三日迄に行はれたる小學校教員學力檢定の試驗を受けし婦人は中等科四人にて内級第者一人裁縫科十七人の内級第十五人なりしと聞くまた同廳構内なる師範學校附屬小學校に於て本年第三期小學校教員及び教授免狀の授與を願ひ出たるものの學力を試驗せられたる合格者のうち女子は中學科教員高等裁縫教授林芳尾、水野いし、淺田とき、小坂たけ、中嶋たゝ、内藤さく、山本てつ、小平やすの八人なりしよし

○天文女學者　當時天文學者中マリヤ、ミッチエル婦人といへば甚だ名高き婦人なるが廿年の間一箇年僅か百弗の俸給にてナンタケットといへる所の書籍館の番人となりて學問をなしたる人にて彼の有名なるベンジヤミン、フランクリンの後裔なりといふ（米國婦人新聞）

○利益の勢力　外國語を學ばんが爲めに外國に留學するものにして能く學び得たるは甚だ稀れなれども或る職業或は商賣のために外國に至るものは十分に且つ甚だ速にその國の語を學び得るもの多し何事も利益に如くものなしと外國の新聞紙に見えたり

○東京にて女子の内職　のうち此ごろ最も盛んに行はるゝは輸出品のハンケチ（この縫方は次號にくはしく出すべし）その次は摺附木の箱張りその次は足袋（底さしと縫上との二種あり）その次はシヤツその次は蝙蝠傘の下縫等なりといふ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

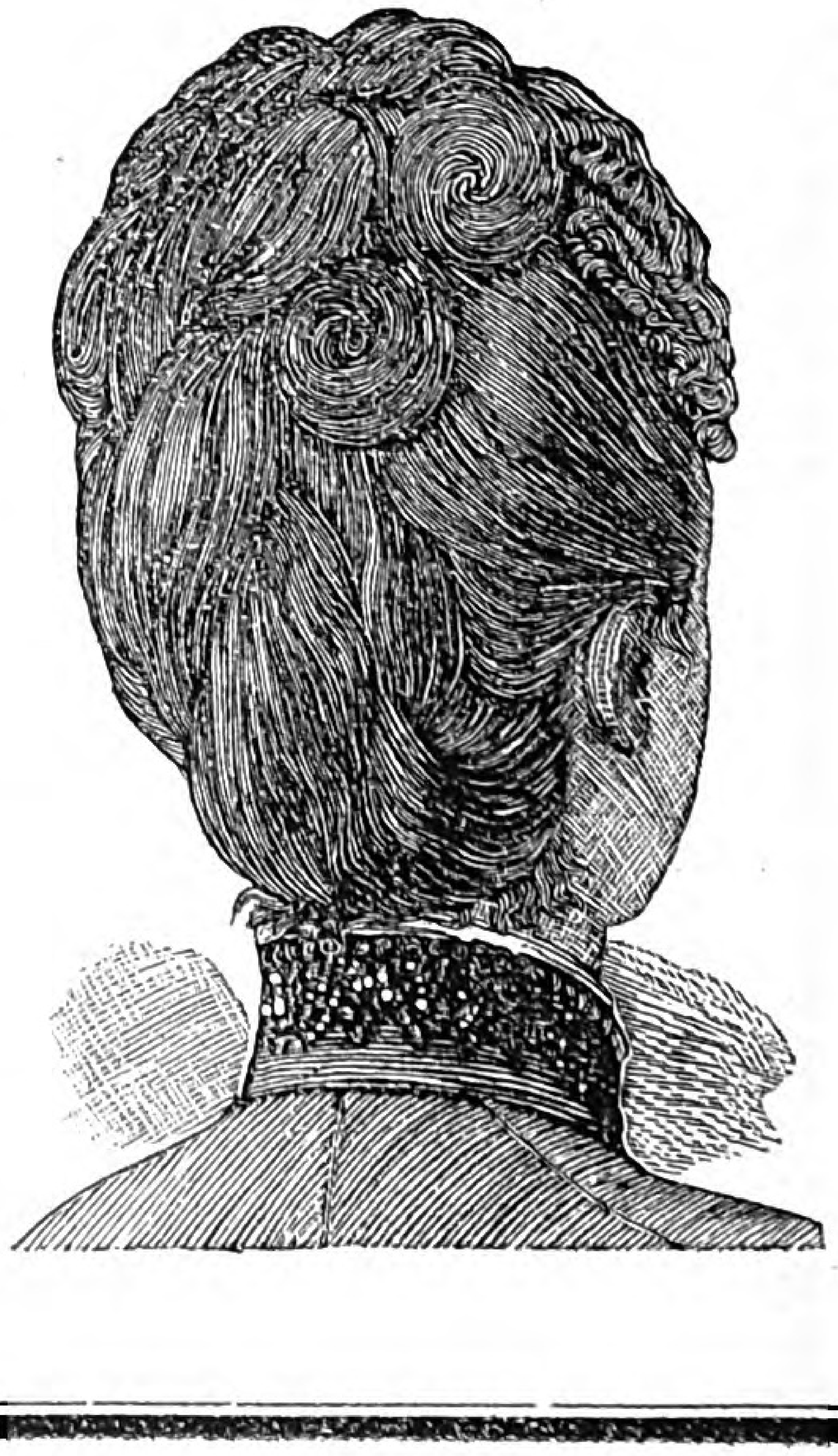
編物會も追々盛んに赴くよし

○束髪の圖解　左に出したる束髪の圖はこのほど弊舍へ達したる倫敦の女皇新聞より寫しとりたるものなるがこの節倫敦および巴理にては正餐（デヰンナー）の饗宴に赴くときの束髪なりとて專ら流行するよしなり

扨て束髪の法は前面の毛と耳より耳まで横に分ちて頭頂の中央にて括りろの括りたる所より二列または三つに割て後の毛と止る臺となるやうに組合せ置き後背の毛とバ櫛にて眞直に解き上げ緩く組みてその毛先は圖の如く曲げ前の毛にて造りたる臺の上に於て鼈甲のヘヤピンを以て止るなり

前の圖

後の圖



○女子職業學校　神田錦町なる同校にては追々生徒の數も増り且つ寄宿せんとを申し出る向も少なからざるにより愈々寄宿生の入學をも許すと決し先きごろより寄宿所の建築に着手し昨今工事中なりと

○立敎女學校　築地の同校にては近ごろ寄宿生の内に品行の善からざるものあるとかありしとのにより同校の幹事は深く之を憂ひいと嚴重なる規則を設けんとて專ら協議中なりとの報を得たり

○女禮講習所　麹町區内にて有志の人々が發起して今度同區平河町三丁目へ西式女禮講習所といふを設け淑女たちの交

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

際法、蹈舞その他總て文明社會に行はるゝ女禮を研究せんと近きに一人の外國敎師を雇ひ入るゝ筈なるよし

○尼公　村雲瑞龍寺尼公にハ目下新潟縣下を漫遊中なるが彼の地より一旦西京へ赴き明春再び出京ありて小傳馬上町なる邸へ永住の御見込なりと聞く

○演劇改良會　にてハ去る十六日築地の大椿樓（待合）に於て依田百川氏の「吉野拾遺名歌の譽」といへる新作ものゝ第一讀會を開きたる景況と脚色の大略ハ本雜誌記欄内に出したれバ就て見給へかし

○紐育よりの來信　米國紐育に滯在せらるゝ某氏より舍友の許へ達したる手紙（九月十六日附）の中に（前略）扨て近ごろ當地にて見聞したる事の一二を記さんにこの程河邊公園と申所を散歩いたししに跡の方にて微かに音樂の聲するハ何れなるやと振り返りて見たるに何れとも分らずさるにても追々に近く聞ゆるハ如何にと思ふ間もなく三輪車に乘りたる人の來るにぞ彼の音樂の聲するハこの三輪車なりし之ハ嘗て新聞紙にて承知せるメロシピード（是までになきものゆゑ新たに造りたる名なり）といひて音樂の器械を三輪車に裝置け乘る人の足にて其器械に觸るときハ一の鉤をずれて音樂を奏する工夫にて近きころ發明の三輪車なりと通り過ぎたる跡にて漸々考へ附きしひしが小生ハ初ての事ゆゑ甚だ珍らしく存しました

近頃當地の新聞に出たる一奇談とすハ或る年若き男が或る婦人と夫婦たるべき約束を結び居たりしがその男ハやがて病の床に就き遂に立ずなりて死亡りたるに醫者の考へにてハ確と病氣の起り分り兼るに付恐らくハ彼の女と結びたる約束を履行する期をまちわびて俗に何病ひとかいへる病ひならんと診斷したるよりその男の母親ハさらバ彼の女こそ我が子を殺したる病の本なれとてその女を相手取て裁判所に訴へ若干金の償を要めたるに近來の奇裁判なりとて評判甚だ高し云々とありたり

○女紅場　根岸邊に住む積田晃齊といふ人ハ新吉原へ女紅場を設け世渡る爲の手業を知らざる女どもを集めて工藝を敎へ職業を授け度旨この程その筋へ出願せり

○朗蘭夫人傳　といふ書物ハ大阪淡路町二丁目十三番地帝國印書會社より出版したるが佛國革命の乱にあたり苦節を守り國に忠夫に貞にして社會の女皇なりとて世界に美名を轟かしたる彼のローランド夫人の詳傳なり殊に春のや大人の流麗解し易き筆を以て譯されたれバ世の杜撰なる譯書の比に非ず

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○理學一斑

〔第十五節〕水ハ液躰なる事　水ハ方圓の器に隨ふことハ今更ら說明をするまでのこともあらず人のよく知る所なり水中に指頭をさし入るゝ時ハ更らに指頭に觸るものあるを感ずるとなくまたその指を抜きとるときもその跡に穴を殘すなどの事もなく直ちに周圍より水來りてその間隙を塞ぎ水をバ摑みとる事も叶はずまた積み重ぬるとも出來がたく杯中に入るゝに充滿したるときハ即ち流れ出でゝ止まるとなかるべし然れども指頭を以て水面に觸るとき指頭に少しばかりの水附着しまたその指をゆる〳〵と抜きとるときハ短き柱となりて後ちに切るゝ事なり或ハまた早朝に出で草木の葉に露を持つと見るに小なる球狀となりてその葉に附着なし居ると見るべし（流動せずして物に附着するの性なり）總て實躰物の中前にいひしごとく方圓の器に隨ひ流るゝ性質のものを「流動體」といひその流動體の中にて右にいへるごとく物に附着する性質あるを「液體」とハいふなり故に水ハ液體なること明かなり

MAXIMS & PROVERBS.

泰西の箴諺

（甲）　Evil gotten evil spent.

㊀　㊁　㊂　㊃

〔意譯〕惡しく得たる物ハ惡しく費やす

（乙）　Fair faces need no paint.

㊀　㊁　㊄　㊅㊂　㊃

〔意譯〕美麗なる顏ハ化粧するに及ばず

（丙）　Far-fetched and dear-bought is good for ladies.

㊀　㊁　㊂　㊆　㊅　㊄　㊃

〔意譯〕婦人方に向く品ハ遠くより來りたる物と貴く買ふたるものなり

○泰西箴諺の直譯

（甲）㊀㊂惡しく㊁得たる㊃費やさる

（乙）㊀美麗なる㊁顏（ハ）㊂一の㊃脂粉（を）㊄要を㊅莫

（丙）㊀遠くより取寄せたる（物）㊁而て㊂貴く買ひたる（物は）㊃婦人方（に）㊄向りて㊅善く㊆有る

TOMODATI.

Asiki okonai wo nasi, asiki kangae wo motu koto wa kanarazu *tomodati* ni yoreri. *Teki* to omou hito wa kaette gai womo nasazu, kurusimi womo ataezu. *Teki* no iu koto wa hazime yori akui ari to omou yueni, gai sukunasi; *tomodati* no iu koto wa tuneni sinsetu nari to omou yueni ayamati ōsi. (*Byron no kotoba.*)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○川元さい女の傳

西の海に暴き波風たち騷ぎしいにし十年の夏の初めの事とか鹿兒嶋の加治木郷にいと憐然なる物語こそありけれ此處に年比すめる川元彥左衛門といへるは心ざま正しく萬に愼み深かりしが彼私學校黨などには交ることなかりしに賊徒は程近き横川郷にうち入りて味方とならぬ者は皆斬り殺しなどさがなき擧動せし時此川元のことを知るものありて渠は武藝も優れ學問の力もありとか聞くに我は顔にもて放れて此度の出兵よも加はらぬこそ心憎けれ迫りて降參させずもあらば吾黨の勢ひなきに似たりとやいふべからむいざ押寄せて其さまを見むと猛者ども十人餘り叓々と川元の家の裏表より取圍みてうてよ搦めよとぞ罵りける這は怪しかる人々の有樣かな彥左衛門おろかなれども無名の戰に出てあたら生命失ふものにあらず此陋屋の垣は疎なれども我爲には逆茂木の備へなり此うちへ足踏入れて後悔なせそと呼はりければ猛者どもは彼生擒れといひもあへず乱れ入るを投げ退け蹴のけて防げども敵は多く此方は單身なればいつ迄か支え得べき終にいやが上にをり重り押へて繩をかけつゝ横川さして引もて行きぬ此騷ぎを妻のさい女は近所にて聞しかば七歳ばかりなる娘のお敬をかき抱きて足を空に馳戾りし甲斐もなく室內は調度ども蹈碎かれて散りぼひわかかり障子もうち外れてあたり隈なきにあきれや扨は我夫ははや引れてゆかせ賜ひしのと窓の柱に身をよせて淚ながらに見出せば賊徒とおぼしく數多ひと群になりて野徑のあなたに行なかに正しく夫の縛められて追立らるゝが見ゆれば帶ひきしめ懐劍とうでゝ及ばぬまでもと馳出せば母さま待てたゞ父上のお迎へにゆくとならば私も倶にと取縋るも情なくはつき放しもあへず二歩三歩ゆきてはもどり五歩六歩かけ出ては反りしが我夫だに敵しかねて斯う淺ましう捕へられ賜ひしあるに軟弱き女卫ざゝ救ひ出し參せむことは思ひもよらず味方にせむとて迫りしならば左右なく斬られ賜ふともあるまじけれど然りとて賊に與し賜ふとの決してなくと思ひ極むるからは長く存命ふはせむとも亦いと覺束なくすべて斯る事ある時は女はど世にくちをしき者はなし讐は横川にありとは知れどそが恨を報ゆべき力とてもなきからは生殘りて何よろれせむこのうへは潔く自害して憂き愧を見ざらむこそ切てもの心遣りなれ幼き子をも終の旅に赴かせむはいと悲しう情

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

なきに似たれど両親に死別れて果敢なき世を送らせむハ本意ともあらず又如何なる猛き人も妻子にハ心ひかるゝ習ひなれば若さる事にて未練なることなどあらば無からむ後までも遺憾ならまし兎にも角にもながらふまじき時に遭へるを今更にくどくだしう假托べきかハと思ひ定めながらも世の乱れに夫を失ひて歎きの餘り狂氣せしかと云れむもいと耻かしなど思ひかへして家のうち見苦しからず取かたづけ新らしき單衣とり出て娘にも着せ自らも着れバお敬ハいと嬉しげよ袖うちふりつゝ父上の在する處に行くにやさらば疾々など急がすに何とかハ答へむ西に向ひて掌をうち合せ目をねふりておはせ然らバ父上の歸り賜ハむなどいひす

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

かすほどの悲しさ思ひやるべし軈て鏡とり出て髮かきあげなどしつゝやをら後に廻りしが懷劍の光りに驚きてやゝと逃退くもこどわりとハ思へど死後れてハと思ひかへして膝の上に抱きわげ胸もと深くさし貫き面色のそや變り果たる死骸を片手に抱きながら我もまた咽喉をのき斬てうつ臥にふしたるを誰かハ知るべき其つぐの日岩の原に住める壹岐何某原田何某など皆ちかき由緣の人々なれば彥左衞門の捕ハれたるとを傳へ聞きて安からぬ事に思ひ忍びやかに來て見れば門ハ鎖して音もせず扨ハ妻子ハ他に遁れてまだ歸りこぬにやあらむ然りとも此處にて待ちつけむハいと便なし打毀ちてや入らむ近所をや尋ねむなど互に語らふに若遁れ出たる者ならバ一處ハ必ず鎖すてぞあるべき斯くいづくも閉ぢたるハ此家のうちに潛み居るにぞあらむずらむとて垣おし破りて入りて見れバ母子ともにとく縡切れてうち臥たり扨ハ夫の生て歸らぬとを知りてから果敢なくも思ひ定めしとよと悲歎やる方なけれど今ハいかにとも詮術なければ野邊おくり式の如くして彥左衞門の歸るともやと待ちたりしに其音づれのなきも理り賊に捕ハれし後同じ加治木鄕のうちなる小山田村の古城趾のうちに繫れしに妻子のはかなく世を去れるとを傳へ聞きて深く悲しみ或夜牢を破りて遁れ出しのど官軍の陣に入らむにハ路隔りて心に委せず然りとて生命ながらへむ樂しさもなければ賊の手に死むよりハとて山中にて腹かききりて失たるを日を歷て見出し者ありて由緣の人に告しかば是をも同じ墓所にをさめしとぞさい女に二個の弟あり名嶋の直竹といへるハ警察官にあり其弟の生竹といふハ海軍の職にてともに戰地に赴きしかど曾てたよりも聞ざりしに後に云々ありしと告越したる時直竹と生竹との歌あり直竹のハ

　昨日まで草の葉末よ見し露の今宵ハなどか袖におくらむ

又生竹のハ

　常闇の夜晝分ぬ世なりとも斯るあされハあらじとぞ思ふ

◎雜記

○學校家庭子女輕患微傷手當法

左に譯し出したるものハエデヰンボロー醫學校の講師ジヨンスヨツス醫博士の記されたるなれば醫學上確實のものなりとてカリー氏幼兒敎育學の中に載たるを父母敎員など常よ子供を取扱ふ人々の心得にもとこゝに掲げぬ

後々に述ぶるところのものハ唯通常よ子女の患ふる病氣に

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

就き直ちにその取扱ひをなすべき案内ともなさんが爲にて父母學校教員などのごとく常に子供を取扱ふものをして醫者を招くほどの事にもあらず或はまた醫者を招くも急の間に合ざる時にこれが手當をなすべき心得の便を得せしめんが爲めなれば子供の各種の病氣に就一々別々に述立つる事をばこゝより漏しぬ

急病或は怪我など不意のことに備ふる爲め平生用ふる藥品の少し宛を備意しまたその分量を心得置くと必要なり殊に藥店の遠き所にありては最もこの用意なかるべからず扨て平生備へ置くべき藥品はカストル油、センナ舍利別、マグチシヤ、灰色粉(水銀と炭酸石灰)、ドーヴオル氏粉、安質母尼酒、吐根酒、吐根末、炭酸石灰合劑、石灰水、結麗阿曹篤、綿撒糸および油皮また生彈力脂、繃帶少しばかり等なりとす

病氣の徴候は常に子供を取扱ふものゝ氣を附くべきことにて寒顫あり、食欲を失ひ、渇飲あり、常に異りて面色赤く、心旒浮とし、頻りに眠氣を催ほし或は横臥を好み、精神憂鬱、常になく皮膚に熱あり、咳或は噴嚔をなし、眼中濡ひ、身體の關節一般に痛を覺え、皮膚に風疹を生じ、嘔吐下痢、腹部の腫脹、痩せ衰ふるなど皆病氣の徴候なり斯のごとき徴候は大体暫時にして起り左ほどの事とも見えざるものなれども聊さかの事より大病となるは常にある事なるがゆゑに平生小供の容貌に注意し輕症のうちに手當をなすべき事なり(不完)

○吉野拾遺名歌の譽

演劇改良會の會員なる依田百川氏は同會員の勧めに依り筆を起しその道に精しき川尻某の補助を得て一編の題帖を著作されその事實は正史に取りて吉野拾遺名歌の譽と題し原案全くなりたるを以て會員の人々は去る十六日の午後一時より築地大椿樓にて第一談會を開きたり來會せられたる夫人の方々には伊藤山縣兩伯爵夫人伊藤松方兩令孃および下田歌子どの男子の方には伊藤伯爵を初め參らせ渡邊洪基外山正一伊東巳代治末松謙澄重野安繹服部一三矢田部良吉藤田茂吉嶋田三郎等の諸氏にて市川團十郎も參れり人集り座定りてのち依田氏はまづ題帖を讀み上られ後に至り川尻氏之を讀上げ讀切毎に諸氏の評論ありて大に修正を加へ到底正史によりてその實を失はざるは緊要なれども演劇は固より正史講釋にあらざれば美術たるの本意を失ふべからずその間仕組といひ文章といひ頗る優美にして人心の感動を惹き起さしむるが第一なりとの論最も賛成を得たるよしにてその脚色の大要はこのごろの日日

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

新聞及び報知新聞に掲げゝれば左に抄出す
扨てろの新作の趣意を聞くに題名にもあるごとく其事實を吉野拾遺といへる書に取り男方にハ楠正行女方にハ辨の内侍を立ものとなし楠正儀と伊賀の局を助となして正行が辨の内侍を賜りたるを辞し「とても世にあがふべくもあらぬ身の假の契をいかで結ばん」といへる歌と如意輪堂に「返らじとかねて思へば梓弓なき數に入る名をぞ留むる」といへる歌に因みて作れるものにして専ら女の立ものをして立派の働をなさしむるを主意とし辨の内侍、伊賀の局をして充分の技倆を顕はさしめんとの趣向なり先ろの本節を申さバ
〔序幕〕（芳野行在所惣門外の場）この場ハ芳野總門外に守兵どもが南北朝の形勢を噂するところに芳野方の臣鷲野平内左衛門時景の郎等關の伴吾が時景と多田院別當千嶋法橋との二人よりの密事の使ひを承はり京方高の師直に内通して立戻り師直の返簡を二人に渡す是にて二人ハ師直よりの頼みにより師直の懸想せる美人辨の内侍を奪ひ出さんことを巧む」こゝに楠家の老僕安達藤六の娘舊を辨の内侍の腰元梅ケ枝が里見乃臣淺川主計と密通せるがこのところに落合ふて色合の一條ありトヾ時景の爲めに之を見とがめられろの不義の落度を械に時景が嚇しつ賺しつ二人を引立てゝろの陣所につれ歸ると段落とす
案ずるに（報知新聞に載せたる批評なり即ちろの前書に由るときハ演劇改良會々員の異議の大意ならん以下案ずるにとあるハ皆同じ）この一段ハ守兵の噂にて當時の形勢の大躰を示し時景法橋の奸計みを以て辨の内侍の遭難および楠正行がこれを救ふて情縁の緒をひらく張本となし内侍に因ある梅が枝を奇貨として時景が己れの奸計を媒助せんとする趣きを暗にうつして内侍をオビキ出だすの案へを伏する等すべて全篇の襯子となすにて止むに已まれぬ鷄肋なればさして瑕とすべき點ろなき以上ハ存せざるを得ざるべし殊に主計梅ケ枝の色合のところハ全く削るべしとの異議も出しかど可成手短かにするとの修正説に落着きたるよしなるが兩人の色合ハ後段内侍正行の情縁の淡きを反映する陪襯となるものなれバ縦ひ陳套き嫌ひハあるとも無くてハ全幅に色澤を失ふべしたゞろの色澤を失なはぬを限りとして成るべくこれを手みじかにするハ益々妙なり
本誌記者の愚考にハ主計と梅ケ枝との情事ハ西洋の風俗のごとくなるハ少しも妨げずと思へど南朝のころの風俗に左

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ることもあるまじければ矢張日本風の情事ならんさらばこの一事は甚だ宜ろからず何との他に工夫あらまほしゝ

(辨の内侍部屋の場)この場は辨の内侍が閑室に坐して古今集を讀みながら「流れては妹背の山の中に落つるよし野の川のよしや世の中。貫之朝臣がえらまれし昔は妹背の中にれつるも今は都へ通ひ路の中を隔つるよし野川かゝる深山の假宮にうきは我が身に染む木がらしの風も敵かと驚ろかれ便りに聞くは修羅道の外には何の音傳さへなくむしの音を友としてあるに甲斐なき皇居のありさま」と嘆ずるを承けてかたはらに侍りて薙刀の身と拭ひ居る篠塚伊賀守のむすめ伊賀の局のセリフあり彼れこれ互ひに述懐の中に迯みにその身分智勇を推奨してあひ慰さめあひ勞らひ遂に(内侍)女子同士で語らふも所詮およばぬ天下の大事かねて妾が心中に秘して今までいはざりしが實は天下の豪傑にこの身を寄せて因みとむすび内外ともに力らを合せおもふ忠義を貫ぬかんと心ろと決して居たツィのふ(局)わりふと合はするの御詞妾も忠義の勇將に縁と求めて力らと頼み云々のセリフあり感慨果しもなきとりから前段の梅ヶ枝つかひとなりて二階堂に在はす侍内の叔母の疾ひあつきよしと報じ來たるト〻内侍はこれに赴かんとて暇乞ひまれくに入るアト法橋の僕横山丹下椽の下にしのぶを段落とす

案ずるにこの一段はじ先古歌より嘆と發す神音高超こそよ妹背の二字はやく全篇の大主腦と抉出し來る用意措辭二つながら巧妙一時に絕ずといふべし内侍と局の應對中にその兩人の素性と示し天下の豪傑忠義の勇將のセリフにて後段内侍が正行と慕ひ局が正儀に婚するの案と伏するなどはふまでもなく梅ヶ枝の齎らせる手紙の最初より叔母の親筆ならぬは大によし一方にその他人の手に成りし疑がひと留め一方にはまた内侍が梅ヶ枝と疑がはぬ心よりその叔母の手蹟ならぬにて即ち叔母の疾ひのあつきと思ふ趣きと添ゆるものにして些かのことながら轉々妙味と覺ゆ

むかし翁の著戯曲十種と讀めるに一ノ谷嫩軍記中石屋の場にその古歌にて手と迎せると激賞しありしやうに記憶せり内侍のセリフは豈ゑ藍本とこゝに取る乎(未完)

〔記者曰す婦人の高等教育と題すると夫婦大學とは本誌上に餘白なきを以て次號に掲載致そべければわしからず思し給ひてよまた諸方より投寄の名篇もいと多かれど記者の手許に達したる順序に隨ひ掲ぐべし序ながら申置くになん〕

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

◎新作物語

○巣守の妻　第九回　　春のや主人稿

姦しといふ字をその儘なる、小杜の奥坐敷の客と主人、主婦は然はいへど言葉尠なにて時々受答をするのみなれど、お客の奥さまは輕い口前、一個は器量よしの自慢女、ことしは漸々に十六位、奇麗に結ひなしたる束髮出だち、時々公然とか權力とか、何やら嚴格しい言葉を用ひて、母にもまけぬ氣のことば澤山、母子が取揃ッてペチャ〳〵クチャ〳〵、滔々瀧口の眷族とは、早くも讀むお方が知ッてゞあらう、

瀧口の細君は調子よ乗て「イ、エチ何致して、お坊さん所じやございません、實にお感心な事だと申して、イ、エサほんたうに恐れ入ました、やう〳〵お廿三やお廿四で、たッた一年やそこいらで以て外國の學校とお卒業なすッて……さう、お卒業じやアない、エ、御賞典、さう、御賞典とやらを遊ばしたッて、旦那もそれは〳〵感服を致しまして、寔に恐れ入ッた、お發明なことだ、お幼少折からお利口であッたが、チヤ〳〵何でそとへ、御賞典の事は、チヤ〳〵お宅へは、チヤ〳〵さうでございますの、アノ薩張毫末も郵便にも、オヤ〳〵何なすッた譯なんでせう、今日の新聞に載ッて居まして、始めて……大層よ褒てございまして、寔にお羨ましい事だ、あんな佳いお兒をお持遊ばして……何致して寔とに「不」未熟で爲やうがございません、やう〳〵今年が卒業でございまして、横文字の書も習ひまして、漸々人並にはなりましたけれど、此間も「タルチル」西洋人の名）さんの奥さまと一所に、一寸鴻の臺へ参りまして、色々通辨をさせられまして、一日苦しい目を見たと申して、イ、エサ通辨に骨の折るやうでは、倘々學問が足らないト申して、毎日書ばかりに凝ましてチ……ハアその事も所々方々から、色々申し込もありますけれど、何の嫁入をする位なら、立派な學問のお出來なさるお仁へ……ハア六かしいことを申しましてチ、ホヽヽ、○自身が學問を致したもんだから、さういふ考へも無理のない事だ、決して急ぐには及ばぬ事、隨分見知合ひのお方の中にも、立派な御子息のあるものあれば、何れ色々と御相談をして見て、万一お互に御緣があらば、ト如斯に毎々から夫のも申して、（少々この處で行留りしが、忽地語を繼ぎて又ペチャ〳〵）「ほんとに新さまがお留守中は、定めしお寂寞うございませうチエ、トウに伺はねばなりませんでしたが、先刻申しましたやうな譯で、……恰どモウ一年ばかし、ほんとに年月は

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

走るやうで、段々……何致して貴婦なんざア些ともお變りなさりませんが妾なんざア、オホヽヽヽ、どういたして年増に老込ンで參りまして……

相も變らざる細君のお多弁、越野の受け太刀も四度路になりて漸々苦しさうな眉根の塩梅、勿論けふはしも越野の肚には、不断と異なりたる心労ありて、單に細君の無間断の話と、五月蠅聞づらいと思ふのミでなく、別に今の内に話を疊みて、速く立歸りて呉よかし、ト竊かに願望する原因ありけり、その理由は何事ぞと問はんに、マア雑と如斯ものなり、

(越野の肚)よもや民の事は知るまいとは思へど、万一聞知りなバ口の多い細君、ヤレあの女は

六百八十一

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

氷屋の女中で、元は大阪の下宿屋の娘で、履歴は箇樣〱、爲人は云々、無學で無作法で、ト所々方々、喋舌ッて回るのは極ッた事、万一そのやうな譯とならば、第一新作の大きな耻辱、お民の來歷と知ッて居るのは、全く瀧口の細君ばかり、どうか新作が歸るまでは、どうか彼お民の來て居る事と、どうぞ知られないで置きたいもの、幸ひ先刻からお隣家へ招ばれて、何としてゐるのか顏と出さぬは、結句上都合、大きな幸ひ、さりとて程たてば歸るは必定、どうぞ倘すこししや歸ッてくりやるな、エ、モウ瀧口の細君は、一体何の用で思ひだした樣に、何で突然に無沙汰見舞、モウ〱娘自慢聞き飽た、エ、モウ宜い加減に歸ればよいに、不番しいは今日のお世辭、何で「新」の事と喋々しく、褒てもらふたとて嬉しうない、いつそモウ宜いかふ歸ッてくれ、ア、モウ辛氣や

ト氣はヂリ〱、さりとて歸ッてともいひ出がたさよ、覺えず膝の邊り撫捺れば、「チヤ〱貴婦さまも」リウマチス」で……、矢張御持病の……チヤさうでございますか、何もお互ひに血の道では」トまた候ろれと種に喋々喃々、越野は困り果てゝ苦しい親附、「お民がッカ〱と平生のやうに、爰へ立歸ッて來ねばよいが、一寸この事とお三にはなして、お民に傳させて、斯してゐゝして」越野はこふへ兼て用あり氣に一寸起うとそるその折しも、無念や庭口のふお民の足音、扨こそ失敗たりト越野の心痛、コレ〱入るまいぞ入るまいぞ、トまさかに狂言の文句めいた言と、お客の聞く所で言はれもせず、コリヤマア何したふト思ふ間もなく「慈母さまアノウ慈母さま、如斯に大變に落ましたヨ、如斯に大變に」、ト大な聲、無殘や椽端の九尺二間、障子とサラリッと引開つゝ、栗の籠と提て突立たり、お民の吃驚、越野の苦しさ、母子の客人の怪訝な貌、讀む人想像して見たまへかし、それは格別、元來瀧口は何の爲に、今日突然と訪ひ來にけん、ほと〱一年に餘る間、マルキリ音沙汰なく過去て居ながら、俄かに打揃ッて尋ねて來たには、十分因緣がなうては叶はず、鋭とい目のお方はお察しでもあらうが、けふの給と共に悉しい次第は、いづれ此次にてチエ皆さん、

◎家政要報

○破れ物　人を使ふは氣と使ふなりとさへいへば下女下男と使ふ事は甚だ心氣と用ふべき事なれどもろの內最も困る事は皿鉢その他の器物と壞さるゝことあり田舍ものゝ下女などは毎日幾ツ宛かの品物と壞し年中にては其價も少なかふざる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

べし譬ひその金額ハ僅かなるも壊し次第になし置くべきにあらざれハ何とか方法と定め置くハ臺所の取締上甚だ要用なりその度毎に以來氣を附くべしと申し附くるとも素より奉公となそほどのものなればその命令の長持すべき筈もなくまた物を壊したるときハ主人より向來を戒しめずとも自ら氣の毒に思ひ向來氣を附くべしと考ふる事ならんが其翌日ハまた陶器の壊れたる音を聞く事なり素より貴重き器物ハ決して下女などに取扱はしむべきものにあらずたゞ日常に使用する普通の器物なるがゆゑに何物にても壊したる時ハ双方より半額を出すと定め置くハ至て良法なりといふものあり甚だ至當なる取極めにて下女を使ふにハ雇入れの時申渡し置くときハ多少壊れものゝ數を減ずる事ならんまた或る人の實驗にて最も功驗あるハ一ヶ月間に一物をも壊はさゞりしときハその下女に月給外に十錢或ハ五錢を褒美として遣はしまた物を壊したる時ハこの褒美に一倍の金額を罰金として月給の中より引去るの方法なりといふこれ平生器物を取扱ふ度に損益を思ひ出すがゆゑに自から愼ましむるの法にして西洋にてもこの法を行ふ家甚だ多きよしなるが如何さま利益ほど恐ろしきものハあらず最良の取極めなりと思はる

○勝手向取締の心得　家事の取締りを掌る婦人ハ自から向事にも氣を用ひ万事に行きわたりて怠ることあるべからず西洋人の言にも主婦の居る室の空氣ハ家内召使に至るまでの温度を昇降せしむるに足るといへりされバ何事にも自から愼みて驕ることなかるべし常に家内を見廻ハり萬づに行わたりて油斷あるべからずといへども召使のものをば心を附けて痛はるべし扨て日用品など買入るゝ時ハ現金に拂ひたるものハ勿論たとひいまだ代金を拂はさるものにても毎日帳面に記入れ一週間毎に勘定をなすべし諸買物の通帳ハ毎夜繰りかへして檢査をなし不審なることあらば速に取たゞしおくべし勘定拂ひをなす時に至りてハ双方ともに忘却して調べ事行き屆かざるものと知るべし家の内をば常に清潔にする事を勉むべし臺所流し元の邊へも折々見廻はり掃除に注意すれバ下女下男にいたるまで命せずとも掃除を怠たることなかるべしまた食物野菜類の殘りあるものとバ下女に命じて日々取り調べ貯藏方等にも氣を附け腐敗などの事なからんやう勉むへし（未完）

○白米小賣相場　一圓につき一等米一斗三升三合二等米一斗四升三合三等米一斗四升七合四等米一斗五升七合五等米一斗七升一合なり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎御伽草

○女狐の不信切

あ山に年ふる九尾の狐あり妻の狐ハ此九尾の本夫に仕ふるといと麁漏に不信切なりしが或時九尾ハ少し悩ましげに見えしに忽ち四足を縮め尾を垂れて死けり此處に下婢の如く召仕ハるゝ猫あり此躰を見て妻狐に告しかば遉に驚きて其死骸のもとに來りてつい居たり猫ハ熟く主人の頓死のとを考へて此上ハ寡にてや世を送り賜ふらむ又よき後夫をや迎へ賜ふらむなど思ふ折ふし年若き狐入り來りて妻君に逢ハせられよといへば猫ハ主人の死亡しとを告て御對面かなふまじといふに其狐ハ否おのれハ妻君の婿かねにとて來しなれバ疾此事を申賜へといふに猫も心得て斯くと妻狐に通ずれバそれハ九尾ある狐にや妾の本夫とたのむハ九尾ならでハ不應からずと言放ちけり是より二頭三頭うち連れて來る度ごとに尾の多きが追々に集り來て九頭目に當れるハ九尾の狐ありけり猫ハ是で婿となり賜ふべき者と思ひしかバ斯を言入れしに妻狐も打悦びつゝさらば此汚穢ハしき死骸を片つけて愛度婚禮の用意をすべしといふ時彼死骸の動くよと見えしがムツクと起て驚く妻狐も

下婢の猫も婿にならむとて待たる狐も皆噛殺したりとぞ這ハ男狐が不信切を試さむとてせし所爲なるべし人の死したる後なりとて不信切なる事あるべからずとなり

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

○數學問題

(1) 一船あり十二日間の粮食を餘す俄然風候變じたるが爲め尙十八日を經ざればその餘期せる港に着く能はざるを知る依て問ふ每日の食量を若干に減ずべきか

(2) 某數あり一ト八分の三を以て除すれば十ト十一分八を得るといふ某數若干(答式は來る十一月十日迄に記者の手許に達すべきものとする後の到着は本誌に揭げず)

○第三十八號數學問題の答式

$16\times50:5\times60::128:x=\frac{5\times60\times128}{16\times50}=48$ 答四斗八升

(答者)東京山本ふで○西村淸○大井祐定○岡山堤鉦太郎○大坂溝口龜之助○同半田とし○同岩田はる○西京市川うめ○宮城伊東ちか○千葉宮川大七○新潟松川信義○荒川よし

◎寄書

○米價の事　　東京　稻田稔

貴舍雜誌中家政要報の欄内に米價を記載せらるゝを以て時價の高低を知り家政上の便利は云ふを待さるなり吾此頃或る書と見しに左の條あり寫して貴舍に投じ古今の對比に便ず

讃岐國の人森長見著述の忘貝といへる假名文を見しに其中に米價の事を載せて日本記に顯宗天皇二年歲比登稔百性殷富稻一斛銀錢一文とあり又續日本記に元明天皇和銅四年錢一文に米穀六升とあり又三代實錄に淸和天皇貞觀八年二月大政官處分定左右京白米壹升直錢四十文前二十文今加十四文黑米三十文前十八文今加十二文是歲穀價騰踴東西津頭白米一斛七貫二百文黑米四貫白文由是增定京邑沽價とあり又白煉鈔に後堀河院寛喜二年六月二十四日甲申定米價斛一貫文とあり又太平記に元亨元年夏大旱此年錢三百文と以て粟一斗と價とあり又重編應仁記に弘治三年五月廿三日より八月九日迄天下大旱と年金壹両を以て米五斗と交易す前代未聞の事と記せり又秋齋閑語に室町殿日記を引ける文有曰御局衆半下衆切米二十石實拂可申由被仰越は此頃兵庫之賣買一斛六匁三分五厘之由吹田新左衛門申は御得心可有之はとの文にて是は天文九年の事なり又草廬雜談を見れば古田兵部の米と賣て請取を出しに十文目に付壹斛替なりとの文にて是は慶長四年卯月十五日兵部判とあり又太平記の評を見れば楠の米と買山門に寄附し軍餉にも備ふ米一千二百餘石を黃金白兩にて買得られたる事を記せり又三代實錄に貞觀九年四月辛卯東西始置常平所出官米而糶之米一升直新錢八文京邑之人來買者如雲是時穀價騰踴內外飢饉米一斛直新錢一千四百由是官糶以救俗弊焉と見たり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

驛遞局認可

米國フルベッキ校閲
日本清水彦五郎訂正
菊池武信著述

英語發音秘決

正價二拾五錢
郵送費八錢
郵券代用送費共三拾四錢

此書ハ世間流布ノ獨學自脩等ノ書ノ如ク原文ニ不充分ナル假名ヲ附シタル杜撰ノ者トハ異ニシテ菊地先生多年教授ノ經驗上其實効ヲ得ラレシ者ト歐米諸博士ノ發音法トヲ併セ記シ殊ニ「フルベッキ」清水両先生ノ叮嚀ナル校訂ヲ加ヘラレタル者ニシテ英字廿六ノ名稱ヨリ各字及ヒ綴字ノ發音法音符默字ノ概則文章讀方法數字重字略語等ニ至ル迄凡ソ正則ヲ以テ英語ヲ學ブノ材料ハ一モ漏ス所ナク殊ニ中間圖書ヲ抑テ發音機ノ作用ヲ示シタレハ此書ニ據テ習學セバ教師ニ就クヲ要セスメ其發音ノ正シキヲ得ルヤ毫モ英米人ニ異ルコト無キニ至ル可シ

体操傳習所卒業
千葉師範學校教員 馬場壽編

新撰小學體操書

全三册

上卷 遊戯ノ部 拾五錢 郵送費四錢
中卷 美容術隊列運動 徒手運動 貳拾錢 同 六錢
下卷 亞鈴運動 球竿運動 拾五錢 同 四錢

右書ハ馬場壽君卓越ノ學識ト多年軀体教育ニ從事シテ得ラレタル經驗トヲ以テ教育ノ理法ニ從ヒ小學校ニ適合スベキ樣編纂セラレタルモノニメ完全無欠比類ナキノ小學体操書ト云フベシ上卷ニハ極メテ愉快ニシテ直チニ行フヲ得ベキ遊戯二十余種ヲ記シ中卷ニハ隊列運動美容術徒手運動ヲ載セ下卷ニハ啞鈴運動並ヒニ球竿運動ヲ記シ當時教科書中各縣ニ於テ需求最モ多キノ書ナリ

東京大學醫學部大條昆隆校閲
醫學專脩祖谷才司編輯

醫術開業試驗問題答按錄

定價郵税共 四拾錢
郵券代用四拾四錢

本書ハ明治十二年ヨリ十八年ニ至ル內務省發附ノ醫術開業試驗問題幷ニ答按ヲ掲載シ且篇頭ニハ該試驗ニ關スル諸則ヲ載セリ實ニ應募者必讀ノ書ナリ

發兌 日本橋區馬喰町二丁目一番地 石川治兵衛
賣捌 東京々橋區南鍋町貳丁目 積文舍別局

●

詩文和歌添削

詩文ハ月謝三十錢和歌ハ月謝廿錢モシ照會ノ事アラハ往復ハガキヲ御用ヒアルベシ

東京麻布富士見町廿號地 添削者 稻村城山

舍告

本誌賣捌き所の內にて弊舍へ其代價を交付せざる向も有之因て賣捌き差止むるも難斗若し右の場合に至り看客諸君へ本誌到達致さゞる節ハ直ちに弊舍へ御注文被下度此段豫告仕置き候也

積文舍會計敬白

本誌代價表

壹冊	正價金四錢	此郵税壹錢
拾冊	同金三拾八錢	同拾錢
二拾冊	同金七拾五錢	同二拾錢
三拾冊	同金壹圓拾錢	同三拾錢
四拾冊	同金壹圓四拾錢	同四拾錢

但シ東京十五區內郵税不申請

本舍は御注文有之と雖とも前金御拂込無之間ハ雜誌配達不仕事に相定候に付御注文の節ハ必ず代價郵税共郵便爲替又ハ通運便にて御送附あらんことを希ふ●郵券代用ハ壹錢切手にて一割增し●郵便爲替ハ芝區芝口郵便局へ御振込み共爲替券と本舍へ御送附可被下候 但し東京十五區內ハ御斷り無之間ハ引續き配達仕候

發行所 東京々橋區南鍋町貳丁目拾壹番地 積文舍

持主兼印刷人 松本義弘
編輯人 初鹿野鎌五郎

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY